

# 2016年の回顧と新年の展望

## ～ 2016年の回顧 ～

### 国内景気～総じて横ばい圏内で推移

2016年の国内景気を振り返りますと、中国等の新興国をはじめとする海外経済の減速に加えて、熊本地震の発生、英国のEU離脱決定に伴う円高・株安の進行なども下押し要因となるなか、総じて横ばい圏内の推移にとどまりました。なお、11月の米国大統領選挙におけるドナルド・トランプ氏の勝利は、新たな政策への期待感などから円安・株高をもたらし、短期的には日本の景気にとってプラス材料となりましたが、不確定な部分が多く、先行きの予断を許さない、不透明な状況が根強く残りました。

項目別にみますと、個人消費は総じて低調に推移しました。雇用・所得環境は改善傾向にありましたが、暖冬や大型の台風など天候不順が下押し要因となったほか、将来不安等を背景とした節約志向も根強く、改善の足かせとなりました。また、天候不順に伴う野菜等の物価上昇も家計の重しとなりました。

設備投資は、横ばい圏内での推移となりました。円高により、これまで堅調に推移していた企業収益の改善が一服したほか、力強さを欠く海外経済や受注の先行き不透明感も企業の投資マインドを慎重にさせました。

生産は、力強さを欠く海外経済を背景に輸出が伸び悩むなか、一進一退で推移しました。ただし、年後半には、輸送機械、はん用・生産用・業務用機械などで増産傾向が強まるなど明るい動きが広がりました。

### 県内景気～横ばい圏内での推移で製造・非製造業ともに力強さを欠く

県内景気も、国内同様横ばい圏内での推移となり、製造・非製造業ともに力強さを欠きました。製造業では、機械工業の一部に好調な動きがみられた一方、地場産業は国内需要の伸び悩みや輸入品との競争激化等を背景に、総じて厳しい状況が継続しました。非製造業では、公共、民間工事ともに低水準で推移した建設業で厳しさを訴える声が多く聞かれたほか、消費マインド改善の遅れから小売業でも売上が伸び悩みました。また、これまで好調に推移してきた観光関連産業においても、外国人観光客数に増勢鈍化がみられました。

項目別にみますと、個人消費は、力強さを欠く動きが続きました。県内小売店からは、天候不順やリオ五輪視聴で外出が控えられ客足が鈍ったこと、雇用・所得環境が改善傾向にあるにもかかわらず、依然として節約志向が根強いことなどを要因として挙げる声が聞かれました。

設備投資は、医療・介護関連や商業用施設など一部に動きがみられましたが、景気の先行き不透明感が強いなか、新規投資に対する慎重姿勢は払拭されません

でした。

生産は、半導体・液晶製造装置、スマートフォン部品など機械工業の一部で好調な動きがみられました。このうち、半導体製造装置では「過去最高水準の稼働率となっている」との声も聞かれました。一方、宝飾、ワイン、ニット、織物などの地場産業は納入先や取扱品目によりばらつきがみられましたが、全体としては厳しい局面が継続しました。各業界では国内需要の伸びが期待し難いなか、海外需要の取り込みに注力していますが、中国をはじめとする海外経済の減速が足かせとなりました。

なお、観光関連では、これまで増加傾向をたどっていた外国人観光客数の増勢鈍化が懸念材料として浮上しました。特に中国人の減少が目立っており、宿泊客が前年比減少に転じた施設等もみられました。県内の観光関連業者からは「円高に加えて、中国人の旅行スタイルが団体旅行から個人旅行にシフトしている」との声も聞かれました。

## ～ 新年の展望 ～

### 国内景気～横ばい圏内から抜け出し、持ち直しへ

2017年の国内景気は、企業収益の堅調さが雇用・所得環境の改善や設備投資の増加を促し、横ばい圏内から抜け出し持ち直しへ向かうことが期待されます。しかし、国内主要産業の収益は為替相場如何で大きく変動することから、米国のトランプ新大統領の政策や言動に対するマーケットへの影響を注視していく必要があります。加えて、米国が保護主義政策を強めた場合は、貿易の停滞につながり、世界経済の抑制要因となる可能性がありますので注意が必要です。

項目別にみますと、個人消費は雇用・所得環境の改善に伴い緩やかながら持ち直していくとみられます。しかし、株価の動向は消費マインドにも大きく影響を与えることから、消費の動向についても米国の動きがカギを握ると言えます。

設備投資は、底堅い動きが見込まれる企業収益や、東京オリンピック・パラリンピック関連投資の拡大も期待されることから、概ね増加傾向で推移するものと考えられます。

生産は、品目によるばらつきは解消されないものの、在庫調整が進展する輸送機械や需要の拡大が見込まれるはん用・生産用・業務用機械を中心に持ち直していくとみられます。国内需要が伸び悩むなか、輸出が重要なポイントとなりますので、海外経済の動向、米国の経済政策、為替相場の動きなどを幅広く注視していく必要があります。

### 県内景気～当面は横ばい推移で、その後国内にやや遅れて持ち直しへ

県内景気は、基本的には国内景気に連動して持ち直しに向かっていくものと期待されます。ただし、国内全体と違い、オリンピック関連の恩恵に多くを期待し難いほか、国内景気を牽引する大手企業の業績改善が県内企業に波及するのにタイムラグがあることから、国内と比べると、やや緩慢な動きとなることが予想さ

れます。

項目別にみますと、個人消費は、雇用・所得環境の改善に伴い緩やかながら持ち直していくとみられます。当面は年前半の企業業績と夏季賞与の支給動向に注目していく必要があります。

設備投資も、緩やかに持ち直していくとみられます。なお、「県内企業経営動向調査」（山梨中央銀行）の平成28年度下期（28年10月～29年3月）の設備投資計画においても、実施予定率や投資額に前向きな姿勢が窺われます。

生産は、機械工業で半導体・液晶製造装置の受注・生産が好調を持続するものと見込まれます。県内企業からは「少なくとも3月まではフル稼働が続き、それ以降も高水準で推移する見通し」との声が聞かれます。一方、宝飾、ワイン、ニット、織物などの地場産業においては、国内需要の伸び悩み、輸入品との競争激化などから、総じて厳しい状況が続くと見込まれます。ただし、競争力のある高級品や顧客ニーズを捉えた自社ブランド商品の開発・提供などに注力することで、需要を取り込むチャンスは広がっていくものと思われれます。

観光関連は、中国人など外国人観光客の動向が注目されます。当面は春節の予約状況が注目されますが、ドル・円、ドル・元相場の動向が大きな影響を与えると考えられます。

## ～ 酉（トリ）の話 ～

平成29年は、酉年です。酉（鶏）は、キジ目キジ科に属する鳥類で、全世界で飼育されているもっとも一般的な家禽です。その起源は、東南アジアに広く生息しているセキショクヤケイ（赤色野鶏）とする単元説と、インド西部にいるハイロヤケイ（灰色野鶏）、スリランカに棲んでいるセイロンヤケイ、スンダ列島に生息するアオエリヤケイなども家畜化に関係があるという多元説があります。

鶏（ニワトリ）は約4千年前にインドで野生種が家畜化されたと言われていますが、交易商人などの手により、東はインドネシアなどの東南アジアや中国へ、西はペルシア（イラン）からエジプト、ギリシアへと伝えられ広がっていったという説があります。また、日本には弥生時代（紀元前2世紀頃）に、中国大陸から伝来したと伝えられています。

鶏（ニワトリ）の家畜化は、当初は食用目的というよりも、夜明けと夕暮れに鳴く雄鶏の鳴き声によって時を知ることと、雄の闘争本能を利用して戦わせる闘鶏が目的であったとする説が定説です。鶏は日の出前と日没前に採食や交尾などの活動のピークがあり、その際に雄は激しく高い声で鳴くため、人々は古くからその鳴き声によって時刻を確認していたとされています。「古事記」や「日本書紀」に記される天岩戸伝説において、「常夜長鳴鶏（とこよのながなきどり）を集めて鳴かせた」という記述があります。また、闘鶏に関しては、現在は禁止されている国が多いですが、以前は東南アジアの各地のほか、フランスやイギリスなどヨーロッパ諸国でも非常に盛んでした。鶏の飼育が世界中に広がった最も大きな理由は闘鶏のためという説もあります。闘鶏のルールはよくできていて、近代ボクシ

ングの体重区分であるヘビー・ライト・バンタムなどは闘鶏用語から来たものだとされています。

酉年生まれの方は、思慮周到で世渡り上手なので、青年期に出世する可能性が高い反面、虚栄心が強く、派手で優雅を好み、移り気なため、一つのことに専念せず失敗を重ねる傾向もみられると言われています。

わが国の酉年の歴史を振り返りますと、養老律令施行（757）、鎌倉幕府滅亡（1333）、フランシスコ＝ザビエル鹿児島に上陸（1549）、室町幕府滅亡（1573）、第一次伊藤博文内閣発足（1885）、国際連盟から離脱（1933）、広島・長崎に原爆投下、ポツダム宣言受諾（1945）、サッカーJリーグ開幕、皇太子・雅子さまご結婚（1993）、日本国際博覧会「愛・地球博」が開幕（2005）などがあります。

山梨県関連では、甲斐一宮浅間神社現在地に移転（865）、武田信玄死去（1573）、藤村紫朗県権令に任命（1873）、甲府魚市場開業（1897）、甲府商業会議所設立（1909）、日本銀行甲府支店開設（1945）、中央自動車道富士吉田線開通（1969）、県立宝石美術専門学校開校（1981）、市町村合併による「上野原市」、新「山梨市」、「市川三郷町」、「甲州市」誕生（2005）などの出来事がみられました。

なお、酉年生まれの名人としては、安達祐実、有村架純、泉鏡花、尾野真千子、北原白秋、黒柳徹子、小林一三、斎藤工、柴咲コウ、菅原文太、武豊、太宰治、徳川慶喜、西内まりや、福山雅治、星野源、松本清張、武者小路実篤、山下泰裕、与謝野鉄幹、吉永小百合、若山牧水、フランシス・ベーコン、ポール・ラッシュ、リヒャルト・ワーグナーなどがいます。

陰陽五行によると、平成 29 年は、「丁酉（ひのと・とり）」にあたります。「丁」は、季節でいえば 4 月から 5 月にかけて、春から伸びてきた陽気がいよいよ盛んになってくる時期ですが、盛んになった陽気が少しずつ下降線をたどり始めてくることも意味しています。また、「酉」は、果実が成長の極限に達した状態、新しい勢力が台頭してくる状態を示しています。このため、「丁酉」は、「これまで大事に進めてきた活動の成果を得るとともに、それに満足することなく新しいことに挑戦する転機の年」ということになるのでしょうか。

酉年は、古来より革命の年と言われています。これに先立つ平成 28 年は、英国のEU離脱やトランプ大統領誕生など、これまでの流れを変えたい、世の中を刷新したいという機運がみられましたが、平成 29 年もこのような傾向が続くと思われまます。革新の時代を力強く生き抜くためにも、「鶏口となるも牛後となる勿れ」という諺のようにリーダーシップを発揮し、「鶏群の一鶴」となれるよう自らの成長に向かって、まい進する年にしたいものです。

※酉（トリ）の話は、十二支の民俗誌（八坂書房）などから当社で作成

※この資料は毎年12月に当社ホームページ  
(<http://www.yamanashiconsul.co.jp/>) に  
掲載しますので、是非ご活用ください。

2016年12月  
山梨中銀経営コンサルティング株式会社